

城のある町にて

梶井基次郎

青空文庫

ある午後

「高いとこの眺めは、アアツ（と咳をして）また格段でござすな」

片手に洋傘、片手に扇子と日本手拭を持つている。頭が奇麗に禿げていて、カンカン帽子を冠っているのが、まるで栓をはめたように見える。——そんな老人が朗らかにそう言い捨てたまま峻の脇を歩いて行つた。言つておいてこちらを振り向くでもなく、眼はやはり遠い眺望へ向けたままで、さもやれやれといったふうに石垣のはなのベンチへ腰をかけた。——

町を外れてまだ二里ほどの間は平坦な緑。I 湾の濃い藍が、そののかなたに拡がつていゝ。裾のぼやけた、そして全体もあまりかつきりしない入道雲が水平線の上に静かに蟠っている。——

「ああ、そうですね」少し間諛つきながらそう答えた時の自分の声の後味がまだ喉や耳のあたりに残っているような気がされて、その時の自分と今の自分とが変にそぐわなかった。なんの拘りもしらないようなその老人に対する好意が頬に刻まれたまま、峻はまた先ほど

の静かな展望のなかへ吸い込まれていった。――風がすこし吹いて、午後であつた。

一つには、可愛い盛りで死なせた妹のことを落ちついて考えてみたいという若者めいた感慨から、峻はまだ五七日を出ない頃の家を出てこの地の姉の家へやって来た。

ぼんやりしていて、それが他所の子の泣声だと気がつくまで、死んだ妹の声の氣持がしていた。

「誰だ。暑いのに泣かせたりなんぞして」

そんなことまで思っている。

彼女がこと切れた時よりも、火葬場での時よりも、変わった土地へ来てするこんな経験の方に「失った」という思いは強く刻まれた。

「たくさん虫が、一匹の死にかけている虫の周囲に集まって、悲しんだり泣いたりしている」と友人に書いたような、彼女の死の前後の苦しい経験がやと薄い面紗のあちらに感ぜられるようになったのもこの土地へ来てからであつた。そしてその思いにも落ちつき、新しい周囲にも心が馴染んで来るにしたがつて、峻には珍しく静かな心持がやって来るようになった。いつも都会に住み慣れ、ことに最近の心の休む隙もなかった後で、彼は

なおさらこの静けさの中でうやうやしくなった。道を歩くのにもできるだけ疲れないように心掛ける。棘^{とげ}一つ立てないようにしよう。指一本詰めないようにしよう。ほんの些細^{ささい}なことがその日の幸福を左右する。——迷信に近いほどそんなことが思われた。そして早^{ひでり}の多かつた夏にも雨が一度来、二度来、それがあがるたびごとにやや秋めいたものが肌に触れるように気候もなつて来た。

そうした心の静けさとかすかな秋の先駆は、彼を部屋の中の書物や妄想^{もうそう}にひきとめてはおかなかった。草や虫や雲や風景を眼の前へ据えて、ひそかに抑えて来た心を燃えさせる、——ただそのことだけが仕甲斐^{しがい}のあることのように峻^{たかし}には思えた。

「家の近所にお城跡がありまして峻の散歩にはちょうど良いと思います」姉が彼の母のもとへ寄来した手紙にこんなことが書いてあった。着いた翌日の夜。義兄と姉とその娘と四人ではじめてこの城跡へ登った。早^{ひでり}のためうんかがたくさん田に湧いたのを除虫燈で殺している。それがもうあと二三日だからというので、それを見にあがったのだった。平野は見渡す限り除虫燈の海だった。遠くになると星のように瞬^{またた}いている。山の峽間^{はざま}がぼうと照らされて、そこから大河のように流れ出ている所もあった。彼はその異常な光景に昂奮^{こうふん}

して涙ぐんだ。風のない夜で涼みかたがた見物に来る町の人びとで城跡は賑わっていた。
暗^{やみ}のなかから白粉^{おしろい}を厚く塗った町の娘達がはしゃいだ眼を光らせた。

今、空は悲しいまで晴れていた。そしてその下に町は曇^{いづか}を並べていた。

白堊^{はくあ}の小学校。土蔵作りの銀行。寺の屋根。そしてそこそこ、西洋菓子の中に詰めてあるカンナ屑^{くず}めいて、緑色の植物が家々の間から萌^もえ出ている。ある家の裏には芭蕉^{ばしやう}の葉が垂れている。糸杉の巻きあがった葉も見える。重ね綿のような恰^{かつこう}好に刈られた松も見える。みな黝^{くろず}んだ下葉と新しい若葉で、いいふうな緑色の容積を造っている。

遠くに赤いポストが見える。

乳母車なんとかと白くペンキで書いた屋根が見える。

日をうけて赤い切地を張った張物板が、小さく屋根瓦の間に見える。――

夜になると火の点^ついた町の大通りを、自転車ややって来た村の青年達が、大勢連れで遊^ゆ廓^{うかく}の方へ乗ってゆく。店の若い衆なども浴衣がけで、昼見る時とはまるで異ったふうに身体をくねらせながら、白粉を塗った女をからかってゆく。――そうした町も今は屋根瓦の間へ挟まれてしまつて、そのあたりに幟^{のぼり}をたくさん立てて芝居小屋がそれと察しられる

ばかりである。

西目を除けて、一階も二階も三階も、西の窓すつかり日ひ覆おおいをした旅館がやや近くに見えた。どこからか材木を叩く音が——もともと高くもない音らしかったが、町の空へ「カーン、カーン」と反響した。

次つぎ止まるひまなしにつくつく法師が鳴いた。「文法の語尾の変化をやっているようだな」ふとそんなに思つてみて、聞いていると不思議に興が乗つて来た。「チュクチュクチュク」と始めて「オーシ、チュクチュク」を繰り返す、そのうちにそれが「チュクチュク、オーシ」になつたり「オーシ、チュクチュク」にもどつたりして、しまい「スットコチーヨ」「スットコチーヨ」になつて「ジー」と鳴きやんでしまう。中途に横から「チュクチュク」とはじめるのが出て来る。するとまた一つのは「スットコチーヨ」を終わつて「ジー」に移りかけている。三重四重、五重にも六重にも重なつて鳴いている。

峻たかしはこの間、やはりこの城跡のなかにある社やしろの桜の木で法師蟬ほうしぜみが鳴くのを、一尺ほどの間近で見た。華きやしや車な骨に石鱖玉のような薄い羽根を張つた、身体こんちゆうの小さい昆虫に、よくあんな高い音が出せるものだと、驚きながら見ていた。その高い音と関係があると言え、ただその腹から尻尾しっぽへかけての伸縮であつた。柔毛にげの密生している、節を持った、

その部分は、まるでエンジンのある部分のような正確さで動いていた。——その時の恰好が思い出せた。腹から尻尾へかけてのブリツとした膨らみ。隅すみまで力ではち切ったような伸び縮み。——そしてふと蟬一匹の生物が無上にもつたいないものだという気持ちに打たれた。

時どき、先ほどの老人のようにやって来ては涼をいれ、景色を眺めてはまた立ってゆく人があつた。

峻がここへ来る時によく見る、亭ちんの中で昼寝をしたり海を眺めたりする人がまた来ていて、今日は子守娘と親しそうに話をしている。

蟬せみとりざお取竿を持った子供があちこちする。虫籠を持たされた児こは、時どき立ち留まつては籠の中を見、また竿の方を見ては小走りに随ついてゆく。物を言わないでいて変に芝居のようなおもしろさが感じられる。

またあちらでは女の子達が米つきばったを捕えては、「ねぎさん米つけ、何とか何とか」と言いながら米をつかせている。ねぎさんというのはこの土地の言葉で神主かみぬしのことを言うのである。峻たかしは善良な長い顔の先に短い二本の触覚を持った、そう思えばいかにも神主めいただったが、女の子に後脚を持たれて身動きのならないままに米をつくその恰好が呑の

気な^{んき}なものに思い浮かんだ。

女の子が追いかける草のなかを、ばったは二本の脚を伸ばし、日の光を羽根一ぱいに負いながら、何匹も飛び出した。

時^けどき烟^{むり}を吐く煙突があつて、田野はその辺^{あた}りから展^{ひら}げていた。レンブラントの素描めいた風景が散らばっている。

黝^{くろ}い木立。百姓家。街道。そして青田のなかに褪^{たい}しや緒^{しや}の煉瓦^{れんが}の煙突。

小さい軽便が海の方からやつて来る。

海からあがつて来た風は軽便の煙を陸の方へ、その走る方へ吹きなびける。

見ていると煙のようではなくて、煙の形を逆に固定したまま玩具の汽車が走っているようである。

ササササと日が翳^{かげ}る。風景の顔色が見る見る変わってゆく。

遠く海岸に沿つて斜に入り込んだ入江が見えた。——峻はこの城跡へ登るたび、幾度となくその入江を見るのが癖になつていた。

海岸にしては大きい立木が所どころ繁っている。その蔭にちよつぱり人家の屋根が覗^{のぞ}いている。そして入江には舟が舫^{もや}っている氣持。

それはただそれだけの眺めであつた。どこを取り立てて特別心を惹くようなところはない。それでいて変に心が惹かれた。

なにかある。ほんとうになにかがそこにある。と言つてその氣持を口に出せば、もう空ぞらしいものになってしまう。

たとえばそれを故のない淡い 憧^{しょうけい}憬^{けい}と言つたふうの氣持、と名づけてみようか。誰かが「そうじゃないか」と尋ねてくれたとすれば彼はその名づけ方に賛成したかもしれない。しかし自分では「まだなにか」という氣持がする。

人種の異つたような人びとが住んでいて、この世と離れた生活を営んでいる。——そんなような所にも思える。とはいえそれはあまりお伽^{とぎばなし}話^わめかした、ぴったりしないところがある。

なにか外国の画で、あそこに似た所が描いてあつたのが思い出せないためではないかとも思つてみる。それにはコンステイブルの画を一枚思い出している。やはりそれでもない。ではいったい何だろうか。このパノラマ風の眺めは何に限らず一種の美しさを添えるものである。しかし入江の眺めはそれに過ぎていた。そこに限つて氣韻が生動している。そんなふうに思えた。——

空が秋らしく青空に澄む日には、海はその青よりやや温い深青に映った。白い雲がある時は海も白く光って見えた。今日は先ほどの入道雲が水平線の上へ拡がってザボンの内皮の色がして、海も入江の真近までその色に映っていた。今日も入江はいつものように謎をかくして静まっていた。

見ていると、獣のようにこの城のはなから悲しい唸声うなりを出してみたいような気になるのも同じであつた。息苦しいほど妙なものと思えた。

夢で不思議な所へ行っていて、ここは来た覚えがあると思っている。——ちようどそれに似た気持で、えたいの知れない想い出が湧いて来る。

「ああかかる日のかかるひととき」

「ああかかる日のかかるひととき」

いつ用意したとも知れないそんな言葉が、ひらひらとひらめいた。——

「ハリケンハッチのオートバイ」

「ハリケンハッチのオートバイ」

先ほどの女の子らしい声たかしが峻たかしの足の下で次つぎに高く響いた。丸の内の街道を通じてゆくらしい自動自転車の爆音がきこえていた。

この町のある医者がそれに乗って帰って来る時刻であつた。その爆音を聞くと峻の家の近所にいる女の子は我勝ちに「ハリケンハッチのオートバイ」と叫ぶ。「オートバ」と言っている児もある。

三階の旅館は日覆をいつの間にか外した。はず

遠い物干台の赤い張物板ももう見つからなくなった。

町の屋根からは煙。遠い山からはひぐらし。
蜩。

手品と花火

これはまた別の日。

夕飯と風呂を済ませて峻は城へ登った。たかし

薄暮の空に、時どき、数里離れた市で花火をあげるのが見えた。気がつくと思ひで包んだような音がかすかにしている。それが遠いので間の抜けた時に鳴った。いいものを見る、と彼は思っていた。

ところへ十七ほどを頭かしらに三人連れの男の児が来た。これも食後の涼みらしかった。峻に

気を兼ねてか静かに話をしている。

口で教えるのにも気がひけたので、彼はわざと花火のあがる方を熱心なふりをして見ていた。

末遠いパノラマのなかで、花火は星水母くらげほどのさやけさに光っては消えた。海は暮れかけていたが、その方はまだ明るみが残っていた。

しばらくすると少年達もそれに気がついた。彼は心の中で喜んだ。

「四十九」

「ああ。四十九」

そんなことを言いあいながら、一度あがつて次あがるまでの時間を数えている。彼はそれらの会話をきくともなしに聞いていた。

「××ちゃん。花は」

「フロラ」一番年のいったのがそんなに答えている。――

城でのそれを憶い出しながら、彼は家へ帰って来た。家の近くまで来ると、隣家の人が峻たかしの顔を見た。そして慌あわてたように

「帰っておいでなしたぞな」と家へ言い入れた。

奇術が何とか座にかかっているのを見にゆこうかと言っていたのを、峻がぼつと出てしまったので騒いでいたのである。

「あ。どうも」と言うと、義兄あには笑いながら

「はつきり言うとかんのがいかなのやさ」と姉に背負わせた。姉も笑いながら衣服を出しかけた。彼が城へ行っている間に姉も信子（義兄の妹）もこつてり化粧をしていた。

姉が義兄に

「あんた、扇子は？」

「衣囊かぶしにあるけど……」

「そうやな。あれも汚れてますで……」

姉が合点合点などしてゆつくり捜しかけるのを、じゅうじゅうと音をさせて煙草を呑のんでいた兄は

「扇子なんかどうでもええわな。早う仕度したくしやんし」と言つて煙管きせるの詰まったのを気にしていた。

奥の間で信子の仕度を手伝つてやっていた義母ははが

「さあ、こんなはどうやな」と言つて団扇うちわを二三本寄せて持つて来た。砂糖屋などが配つて行つた団扇である。

姉が種々と衣服を着こなしているのを見ながら、彼は信子がどんな心持で、またどんなふうで着付けをしているだろうなど、奥の間の気配に心をやったりした。

やがて仕度ができたので峻たかしはさきへ下りて下駄はを穿いた。

「勝子（姉夫婦の娘）がそこらにいますで、よぼつてやつとくなさい」と義母が言つた。袖の長い衣服を着て、近所の子らのなかに雑つてゐる勝子は、呼ばれたまま、まだなにか言いあつてゐる。

「『力』ちうとこへ行くの」

「かつどうや」

「活動や、活動やあ」と二三人の女の子がはやした。

「ううん」と勝子は首をふつて

「『ヨ』ちつとこへ行くの」とまたやつてゐる。

「ようちえん？」

「いやらし。幼稚園、晩にはあれへんわ」

義兄が出て来た。

「早うお出いでな。放つといてゆくぞな」

姉と信子が出て来た。白粉おしろいを濃くはいた顔が夕暗ゆうやみに浮かんで見えた。さっきの団扇うちわを一つずつ持っている。

「お待ち遠さま。勝子は。勝子、扇持つてるか」

勝子は小さい扇をちらと見せて姉に纏まといつきかけた。

「そんならお母さん、行つて来ますで……」

姉がそう言うと

「勝子、帰ろ帰ろ言わんのやんな」と義母は勝子に言った。

「言わんのやんな」勝子は返事のかわりに口真似をして峻たかしの手のなかへ入つて来た。そして峻は手をひいて歩き出した。

往來に涼み台を出している近所の人びとが、通りすがりに、今晚は、今晚は、と声をかけた。

「勝ちちゃん。ここ何てとこ？」彼はそんなことを訊きいてみた。

「しょうせんかく」

「朝鮮閣？」

「うん、しょうせんかく」

「朝鮮閣？」

「しょう—せん—かく」

「朝—鮮—閣？」

「うん」と言つて彼の手をぴしやと叩いた。^{たた}

しばらくして勝子から

「しょうせんかく」といい出した。

「朝鮮閣」

牴牾^{もとか}しいのはこつちだ、といったふうに寸分違わないように似せてゆく。それが遊戲になつてしまった。しまいには彼が「松仙閣」といつているのに、勝子の方では知らずに「朝鮮閣」と言っている。信子がそれに気がついて笑い出した。笑われると勝子は冠を曲げてしまった。

「勝子」今度は義兄の番だ。

「ちがいますともわらびます」

「ううん」鼻ごえをして、勝子は義兄を打つ真似をした。義兄は知らん顔で

「ちがいますともわらびます。あれ何やったな。勝子。一遍峻たかしさんに聞かしたげなさい」泣きそうに鼻をならし出したので信子が手をひいてやりながら歩き出した。

「これ……それから何というつもりやったんや？」

「これ、蕨わらびとは違いますって言うつもりやったんやなあ」信子がそんなに言つて庇護かばつてやった。

「いったいどこの人にそんなことを言うたんやな？」今度は半分信子に訊きいている。

「吉峰さんのおじさんにやなあ」信子は笑いながら勝子の顔を覗いた。

「まだあつたぞ。もう一つどえらいのがあつたぞ」義兄がおどかすようにそう言うと、姉も信子も笑い出した。勝子は本式に泣きかけた。

城の石垣に大きな電灯がついていて、後ろの木々に皎々こうこうと照っている。その前の木々は反対に黒ぐろとした蔭かげになつている。その方で蟬がジツジツジと鳴いた。

彼は一人後ろになつて歩いていた。

彼がこの土地へ来てから、こうして一緒に出歩くのは今夜がはじめてであつた。若い女達と出歩く。そのことも彼の経験では、きわめて稀まれであつた。彼はなんとなしに幸福であ

った。

少し我が儘わままなところのある彼の姉と触れ合っている態度に、少しも無理がなく、——それを器用にやっているのではなく、生地きじからの平和な生まれ付きでやっている。信子はそんな娘であつた。

義母などの信心から、天理教様に拝んでもらえと言われると、素直に拝んでもらっている。それは指の傷だったが、そのため評判の琴も弾かないでいた。

学校の植物の標本を造っている。用事に町へ行つたついでなどに、雑草をたくさん風呂敷へ入れて帰つて来る。勝子が欲しがるので勝子にも頒わけてやつたりなどして、独ひとりせつせとおしをかける。

勝子が彼女の写真帖を引き出して来て、彼のところへ持つて来た。それを極きまり悪そうにもしないで、彼の聞くことを穏やかにはきはきと受け答える。——信子はそんな好ましいところを持つていた。

今彼の前を、勝子の手を曳ひいて歩いている信子は、家の中で肩縫揚げのしてある衣服を着て、足によきによき出している彼女とまるで違つておとなに見えた。その隣に姉が歩いている。彼は姉が以前より少し痩せて、いくらかでも歩き振りがよくなったと思つた。

「さあ。あんた。先へ歩いて……」

姉が突然後ろを向いて彼に言った。

「どうして」今までの気持で訊かなくともわかつていたがわざと彼はとぼけて見せた。そして自分から笑ってしまった。こんな笑い方をしたからにはもう後ろから歩いてゆくわけにはゆかなくなった。

「早う。気持が悪いわ。なあ。信ちゃん」

「……」笑いながら信子も點頭うなずいた。

芝居小屋のなかは思つたように蒸し暑かつた。

水番というのか、銀杏返いちようがえしに結つた、年の老けた婦おんなが、座蒲団を数だけ持つて、先に

立つてばたばた敷いてしまった。平場ひらばの一番後ろで、峻たかしが左の端、中へ姉が来て、信子が

右の端、後ろへ兄が座つた。ちようど幕間まくあいで、階下は七分通り詰まっていた。

先刻の婦おんなが煙草盆を持つて来た。火が埋うずんであつて、暑いのに気が利かなかつた。立ち去らずにぐずぐずしている。何と言つたらいいか、この手の婦おんな特有な狡猾ずるい顔付で、眼をきよろきよろさせている。眼顔めがほで火鉢を指したり、そらしたり、兄の顔を盗み見たりする。

こちらが見てよくわかつているのにと思い、財布の銀貨を袂たもとの中で出し悩みながら、彼はその無様ぶしつけに腹が立った。

義兄は落ちついてしまつて、まるで無感覚である。

「へ、お火鉢」婦おんなはこんなことをそわそわ言つてのけて、忙しそうに揉手もみをしながらまた眼をそらす。やつと銀貨が出て婦おんなは帰つて行つた。

やがて幕があがつた。

日本人のようでない、皮膚の色が少し黒みがかった男が不熱心に道具を運んで来て、時どきじろじろと観客の方を見た。ぞんざいで、おもしろく思えなかった。それが済むと怪しげな名前の印度人インドが不作法なフロックコートを着て出て来た。何かわからない言葉で喋しゃべつた。唾液をとばしている様子で、褪さめた唇の両端に白く唾がたまっていた。

「なんて言つたの」姉きがこんなに訊いた。すると隣のよその人も彼の顔を見た。彼は閉口してしまつた。

印度人は席へ下りて立会人を物色している。一人の男が腕をつかまれたまま、危う気な羞はじわらい笑はをしていた。その男はとうとう舞台へ連れてゆかれた。

髪はの毛を前へおろして、糊はの寝た浴衣を着、暑いのに黒足袋はを穿はいていた。にこにこし

て立っているのを、先ほどの男が椅子を持って来て坐らせた。

印度人は非道いやつであつた。

握手をしようと言つて男の前へ手を出す。男はためらつていたが思い切つて手を出した。すると印度人は自分の手を引き込めて、観客の方を向き、その男の手振を醜く真似て見せ、首根つ子を縮めて、嘲笑つて見せた。毒々しいものだった。男は印度人の方を見、自分の元いた席の方を見て、危な氣に笑っている。なにかわけのありそうな笑い方だった。子供か女房かがいるのじゃないか。堪らない。と峻は思った。

握手が失敬になり、印度人の悪ふざけはますます性がわるくなった。見物はそのたびに笑つた。そして手品がはじまつた。

紐があつたのは、切つてもつながつてゐるという手品。金属の瓶があつたのは、いくらでも水が出るという手品。——ごく詰まらない手品で、硝子の卓子の上のものは減つていった。まだ林檎が残つていた。これは林檎を食つて、食つた林檎の切が今度は火を吹いて口から出て来るというので、試しに例の男が食わされた。皮ごと食つたというので、これも笑われた。

峻はその箸にも棒にもかからないような笑い方を印度人がするたびに、何故あの男はな

んとかしないのだろうと思っていた。そして彼自身かなり不愉快になっていた。

そのうちにふと、先ほどの花火が思い出されて来た。

「先ほどの花火はまだあがつているだろうか」そんなことを思った。

薄明りの平野のなかへ、星水母^{くらげ}ほどに光つては消える遠い市の花火。海と雲と平野のパノラマがいかに美しいものと思えた。

「花は」

「Flora」

たしかに「Flower」とは言わなかった。

その子供といい、そのパノラマといい、どんな手品師も敵^{かな}わないような立派な手品だったような気がした。

そんなことが彼の不愉快をだんだんと洗っていった。いつもの癖で、不愉快な場面を非人情に見る、——そうすると反対におもしろく見えて来る——その気持がものになりかけて来た。

下等な道化に独^{ひと}りで腹を立てていた先ほどの自分が、ちょっと滑稽だったと彼は思った。舞台の上では印度人が、看板画そっくりの雰囲気の中かで、口から盛んに火を吹いてい

た。それには怪しげな美しささえ見えた。

やつと済むと幕が下りた。

「ああおもしろかった」ちよつと嘘のような、とつてつけたように勝子が言った。言い方がおもしろかったので皆笑った。――

美人の宙釣り。

ちからわざ
力業。

オペレット。浅草気分。

美人胴切り。

そんなプログラムで、晩く家へ帰った。

病氣

姉が病氣になった。脾腹ひばらが痛む、そして高い熱が出る。峻たかしは腸チブスではないかと思つた。枕元で兄が

「医者さん呼びに遣ろうかな」と言っている。

「まあよろしいわな。かい虫かもしれないで」そして峻にともつかず兄にともつかず「昨日あないに暑かったのに、歩いて帰って来る道で汗がちつとも出なんだの」と弱々しく言っている。

その前の日の午後、少し浮かぬ顔で遠くから帰って来るのが見え、勝子と二人で窓からふざけながら囃し立てた。

「勝子、あれどこの人？」

「あら。お母さんや。お母さんや」

「嘘いえ。他所のおばさんだよ。見ておいで。家へは這入らないから」

その時の顔を峻は思い出した。少し変だったことは少し変だった。家のなかばかりで見馴れている家族を、ふと往来で他所目に見る——そんな珍しい気持ちで見た故と峻は思っていたが、少し力がないようでもあった。

医者に来て、やはりチブスの疑いがあると言って帰った。峻は階下で困った顔を兄とつき合わせた。兄の顔には苦しい微笑が凝っていた。

腎臓の故障だったことがわかった。舌の苔がなんとかで、と言って明瞭にチブスとも言

い兼ねていた由を言つて、医者も元氣に歸つて行つた。

この家へ嫁いで来てから、病氣で寝たのはこれで二度目だと姉が言つた。

「一度は北牟婁で」

「あの時は弱つたな。近所に氷がありませんでなあ、夜中の二時頃、四里ほどの道を自転車で走つて、叩き起こして買うたのはまあよかったやさ。風呂敷へ包んでサドルの後ろへ結ゆわえつけて戻つて来たら、擦れとりましてな、これだけほどになつとつた」

兄はその手つきをして見せた。姉の熱のグラフにしても、二時間おきほどの正確なものを造ろうとする兄だけあつて、その話には兄らしい味が出ていて峻も笑わされた。

「その時は？」

「かい虫をわかしとりましたんじや」

——一つには峻自身の不検束ふしだらな生活から、彼は一度肺を悪くしたことがあつた。その時義兄は北牟婁ムロでその病氣が癒なおるようにと神詣なまでをしてくれた。病氣がややよくなって、峻は一度その北牟婁ムロの家へ行つたことがあつた。そこは山のなかの寒村で、村は百姓と木樵きこりで、養蚕ようさんなどもしていた。冬になると家の近くの畑いまで猪いのししが芋を掘りに来たりする。芋は百姓の半分常食になつていた。その時はまだ勝子も小さかつた。近所のお婆さんが来て、

勝子の絵本を見ながら講釈しているのに、象のことを鼻巻き象、猿のことを山の若い衆とかやえんとか呼んでいた。苗字みょうじのないという子がいるので聞いてみると木樵きこうりの子だからと言つて村の人は当然な顔をしている。小学校には生徒から名前前の呼び棄てにされている、薫という村長の娘が教師をしていた。まだそれが十六七の年頃だった。――

北牟婁ムロはそんな所であつた。峻たかしは北牟婁ムロでの兄の話には興味が持てた。

北牟婁ムロにいた時、勝子が川へ陥はまつたことがある。その話が兄の口から出て来た。

――兄が心臓脚気で寝ていた時のことである。七十を越した、兄の祖母で、勝子の曾祖母にあたるお祖母ばあさんが、勝子を連れて川へ茶碗を漬つけに行つた。その川というのが急な川で、狭かつたが底はかなり深かつた。お祖母さんは、いつでも兄達が捨てておけというのに、姉が留守だつたりすると、勝子などを抱きたがつた。その時も姉は外出していた。

はあ、出て行つたな。と寢床の中で思っていると、しばらくして変な声がしたので、あつと思つたまま、ひかれるように大病人が起きて出た。川はすぐ近くだった。見ると、お祖母さんが変な顔をして、「勝子が」と言つたのだが、そして一生懸命に言おうとしているのだが、そのあとが言えない。

「お祖母さん。勝子が何とした！」

「……」手の先だけが激しくそれを言っている。

勝子が川を流れてゆくのが見えているのだ！ 川はちょうど雨のあとで水かさが増していた。先に石の橋があつて、水が板石とすれすれになっている。その先には川の曲がるどころがあつて、そこはいつも渦が巻いている所だ。川はそこを曲がつて深い沼のような所へ入る。橋か曲がり角で頭を打ちつけるか、流れて行つて沼へ沈みでもしようものなら助からないところだった。

兄はいきなり川へ跳び込んで、あとを追つた。橋までに捕えるつもりだった。

病気の身だった。それでもやつと橋の手前で捕えることはできた。しかし流れがきつくて橋を力に上ろうと思つてもとうてい駄目^{だめ}だった。板石と水の隙間は、やつと勝子の頭ぐらひは通せるほどだったので、兄は勝子を差し上げながら水を潜り、下手でようやくあがれたのだった。勝子はぐったりとなつていた。逆にしても水を吐かない。兄は気が気でなく、しきりに勝子の名を呼びながら、背中を叩いた。

勝子はけろりと気がついた。気がついたが早いか、立つとすぐ踊り出したりするのだ。兄はばかされたようでなんだか変だった。

「このべべ何としたんや」と言つて濡れた衣服をひっぱつてみても「知らん」と言ってい

る。足が滑った拍子に氣絶しておったので、全く溺れたのではなかったとみえる。

そして、なんとまあ、いつもの顔で踊っているのだ。――

兄の話のあらましはこんなものだった。ちょうど近所の百姓家が昼寝の時だったので、自分がその時起きてゆかなければどんなに危険だったかとも言った。

話している方も聞いている方も惹き入れられて、兄が口をつぐむと、静かになった。

「わたしが帰って行ったらお祖母^{ばあ}さんと三人で門で待つてはるの」姉がそんなことを言っ
た。

「何やら家にいてられなんだわさ。着物を着かえてお母ちゃんを待つとろと言うたりして
なあ」

「お祖母^{ばあ}さんがぼけはつたのはあれからでしたな」姉は声を少しひそませて意味の籠^{こも}った
眼を兄に向けた。

「それがあつてからお祖母さんがちよつとぼけみたいになりましたなあ。いつまで経つて
もこれに（と言って姉を指し）よしやんに済まん、よしやんに済まんと言いましてなあ」
「なんのお祖母さん、そんなことがあるうかさ、と言っているのに」

それからのお祖母さんは目に見えてぼけていつて一年ほど経ってから死んだ。

峻^{たかし}にはそのお祖母さんの運命がなにか惨酷な気がした。それが故郷ではなく、勝子のお守りでもする気で出かけて行つた北牟婁^{ムロ}の山の中だっただけに、もう一つその感じは深かった。

峻が北牟婁^{ムロ}へ行つたのは、その事件の以前であつた。お祖母さんは勝子の名前を、その当時もう女学校へ上つていたはずの信子の名と、よく呼び違えた。信子はその当時母などところらにいた。まだ信子を知らなかった峻には、お祖母さんが呼び違えるたびごとに、信子という名を持った十四五の娘が頭に親しく想像された。

勝子

峻は原っぱに面した窓に寄りかかつて外を眺めていた。

灰色の雲が空一帯を罩^こめていた。それはずっと奥深くも見え、また地上低く垂れ下がっているようにも思えた。

あたりのものはみな光を失つて静まっていた。ただ遠い病院の避雷針だけが、どうしたはずみか白く光つて見える。

原っぱのなかで子供が遊んでいた。見てみると勝子もまじっていた。男の児こが一人いて、なにか荒い遊びをしているらしかった。

勝子が男の児に倒された。起きたところをまた倒された。今度はぎゅうぎゅう押えつけられている。

いったい何をしているのだろう。なんだかひどいことをする。そう思つて峻たかしは目をとめた。

それが済むと今度は女の子連中が——それは三人だったが、改札口へ並ぶように男の児の前へ立つた。変な切符切りがはじまった。女の子の差し出した手を、その男の児がやけに引つ張る。その女の子は地面へ叩きつけられる。次の子も手を出す。その手も引つ張られる。倒された子は起きあがつて、また列の後ろへつく。

見ているとこうであつた。男の児が手を引つ張る力加減に変化がつく。女の子の方ではその強弱をおっかなびつくり期待するのがおもしろいのらしかった。

強く引くのかと思うと、身体つきだけ強そうにして軽く引つ張る。すると次はいきなり叩きつけられる。次はまた、手を持ったというくらいの軽さで通す。

男の児は小さい癖くせにどうかすると大人の——それも木挽こびきとか石工とかの恰好そっくり

に見えることのある児で、今もなにか鼻唄でも歌いながらやっているように見える。そしていかにも得意気であつた。

見ているとやはり勝子だけが一番よけい強くされているように思えた。彼にはそれが悪くとれた。勝子は婉曲えんきよくに意地悪されているのだな。——そう思うのには、一つは勝子

が我が儘わままで、よその子と遊ぶのにも決しているいい子にならないからでもあつた。

それにしても勝子にはあの不公平がわからないのかな。いや、あれがわからないはずはない。むしろ勝子にとっては、わかつてはいながら瘦我慢を張っているのがほんとうらしい。

そんなに思っているうちにも、勝子はまたこつびどく叩きつけられた。瘦我慢を張っているとすれば、倒された拍子に地面と睨にらめつこをしている時の顔付は、いったいどんなだろう。——立ちあがる時には、もうほかの子と同じような顔をしているが。

よく泣き出さないものだ。

男の児こがふとした拍子にこの窓を見るかもしれないからと思つて彼は窓のそばを離れなかつた。

奥の知れないような曇り空のなかを、きらりきらり光りながら過よぎつてゆくものがあつた。

鳩^{はと}？

雲の色にぼやけてしまつて、姿は見えなかったが、光の反射だけ、鳥にすれば三羽ほど、鳩一流のどこにあてがあるともない飛び方で舞つていた。

「ああ。勝子のやつめ、かつてに注文して強くしてもらつてゐるのじゃないかな」そんなことがふつと思えた。いつか峻^{たかし}が抱きすくめてやった時、「もつとぎうつ」と何度も抱きすくめさせた。その時のことが思い出せたのだった。そう思えばそれいかにも勝子のしそうなことだった。峻は窓を離れて部屋のなかへ這入^{はい}つた。

夜、夕飯が済んでしばらくしてから、勝子が泣きはじめた。峻^{たかし}は二階でそれを聞いていた。しまいにはそれを鎮^{しず}める姉の声が高くなつて来て、勝子もあたりかまわず泣きたてた。あまり声が大きいので峻は下へおりて行つた。信子が勝子を抱いている。勝子は片手を電燈の真下へ引き寄せられて、針を持った姉が、掌へ針を持ってゆこうとする。

「そとへ行つて棘^{とげ}を立てて来ましたんや。知らんとおつたのが御飯を食べるとき醬油^{しょうゆ}が染みてな」義母が峻にそう言つた。

「もつとぎうとお出し」姉は怒つてしまつて、邪慳^{じゃけん}に掌を引っ張つてゐる。そのたびに

勝子は火の付くように泣声を高くする。

「もう知らん、放つといてやる」しまいに姉は掌を振り離してしまった。

「今はしようないで、××膏ここうをつけてくくつとこうよ」義母が取りなすように言っている。信子が薬を出しに行つた。峻は勝子の泣声に閉口してまた二階へあがつた。

薬をつけるのに勝子の泣声はまだ鎮まらなかった。

「棘はどうせあの時立てたに違いない」峻は昼間のことを思い出していた。ぴしやつと地面へうつつぶせになった時の勝子の顔はどんなだったろう、という考えがまた蘇えつて来た。

「ひよつとしてあの時の瘦我慢を破裂させているのかもしれない」そんなことを思つて聞いていると、その火がつくような泣声が、なにか悲しいもののように峻には思えた。

昼と夜

彼はある日城の傍の崖の蔭に立派な井戸があるのを見つけた。

そこは昔の土さむらいの屋敷跡のように思えた。畑とも庭ともつかない地面には、梅の老木があ

つたり南^{かぼちゃ}瓜^{うり}が植えてあつたり紫蘇^{しそ}があつたりした。城の崖からは太い逞しい喬木^{きようぼく}や古い椿^{つばき}が緑^{ついで}の衝立^{ついで}を作つていて、井戸はその蔭に坐つていた。

大きな井桁^{いげた}、堂々とした石の組み様、がつしりしていて立派であつた。

若い女の人が二人、洗濯物を大^{おお}盥^{おだらい}で濯^{すす}いでいた。

彼のいた所からは見えなかつたが、その仕掛ははね釣瓶^{つるべ}になつてゐるらしく、汲みあげられて来る水は大きい木製の釣瓶桶^{おけ}に溢れ、樹々の緑が瑞^{みず}みずしく映つてゐる。盥^おの方の女の人が待つふりをする、釣瓶の方の女の方は水をあげた。盥の水が躍り出して水玉の虹がたつ。そこへも緑は影を映して、美しく洗われた花崗岩^{かこうがん}の盥石の上を、また女の人

の素足の上を水は豊かに流れる。

羨^{うらや}ましい、素晴^{すばら}しく幸福そうな眺めだつた。涼しそうな緑の衝立の蔭。確かに清冽^{せいれつ}で豊かな水。なんとなく魅せられた感じであつた。

きようは青空よい天気

まえの家でも隣でも

水汲む洗う掛ける干す。

国定教科書にあったのか小学唱歌にあったのか、少年の時に歌った歌の文句が憶い出された。その言葉には何のたくみも感ぜられなかったけれど、彼が少年だった時代、その歌によつて抱いたしんに朗らかな新鮮な想像が、思いがけず彼の胸におし寄せた。

かあかあ鳥^{からす}が鳴いてゆく、

お寺の屋根へ、お宮の森へ、

かあかあ鳥が鳴いてゆく。

それには画がついていた。

また「四方」とかいう題で、子供が朝日の方を向いて手を拡げている図などの記憶が、次つぎ憶い出されて来た。

国定教科書の肉筆めいた楷書の活字。またなんという画家の手に成ったものか、角のないその字体と感じのまるで似た、子供といえど円^{まる}顔^{がお}の優等生のような顔をしているといったふうの、挿画のこと。

「何とか権所有」それをゴンシヨウと、人の前では読まなかったが、心のなかで仮に極めて読んでいたこと。そのなんとか権所有の、これもそう思えば国定教科書に似つかわしい、手紙の文例の宛名のような、人の名。そんな奥付の有様までが憶い出された。

——少年の時にはその画のとおりこの所がどこかにあるような気がしていた。そうした単純に正直な児こがどこかにいるような気がしていた。彼にはそんなことが思われた。

それらはなにかその頃の憧憬の対象でもあった。単純で、平明で、健康な世界。——今その世界が彼の前にある。思いもかけず、こんな田舎の緑樹の蔭に、その世界はもつと新鮮な形を具そなえて存在している。

そんな国定教科書風な感傷のなかに、彼は彼の営むべき生活が示唆しさされたような気がした。

——食ってしまいたくなるような風景に対する愛着と、幼い時の回顧や新しい生活の想像とで彼の時どきの瞬間が燃えた。また時どき寝られない夜が来た。

寝られない夜のあとでは、ちよつとしたことにすぐ底熱い昂奮が起きる。その昂奮がやむと道端でもかまわないすぐ横になりたいような疲労が来る。そんな昂奮は楓かへての肌を見て

さえ起こった。――

楓樹ふうじゆの肌が冷えていた。城の本丸の彼がいつも坐るベンチの後ろでであった。

根方に松葉が落ちていた。その上を蟻ありが清らかに匍はつていた。

冷たい楓かへでの肌を見ていると、ひぜんのようにについている藓こけの模様が美しく見えた。

子供の時の莫蔭もゑ遊びの記憶――ことにその触感が蘇よみがえった。

やはり楓の樹の下である。松葉が散つて蟻が匍はつてゐる。地面にはでこぼこがある。そんな上へ莫蔭もゑを敷いた。

「子供というものは確かにあの土地のでこぼこを冷たい莫蔭の下に感じる蹠あしうらの感覚の快さを知っているものだ。そして莫蔭を敷くやいなやすぐその上へ跳び込んで、着物ぐるみじかに地面の上へ転がれる自由を楽しんだりする」そんなことを思いながら彼はすぐにも頬ぺたを楓の肌につけて冷やしてみたいような衝動を感じた。

「やはり疲れているのだな」彼は手足が軽く熱を持っているのを知った。

「私はおまえにこんなものをやろうと思う。

一つはゼリーだ。ちよつとした人の足音にさえいくつもの波紋が起こり、風が吹いて

来ると漣さざなみをたてる。色は海の青色で——御覽そのなかをいくつも魚が泳いでいる。

もう一つは窓掛けだ。織物ではあるが秋草が茂くさむらっている叢くさむらになっている。またそこには見えないが、色づきかけた銀杏いちょうの木がその上に生えている氣持。風が来ると草がさわぐ。そして、御覽。尺取虫が枝から枝を匍はつている。

この二つをおまえにあげる。まだできあがないから待っているがいい。そして詰らない時には、ふつと思ひ出してみるがいい。きつと愉快になるから。」

彼はある日葉書へそんなことを書いてしまった、もちろん遊戲ではあったが。そしてこの日頃の昼となし夜となしに、時どきふと感じる氣持のむずかゆさを幾分はかせたような氣がした。夜、静かに寝られないでいると、空を五位が啼ないて通った。ふとするとその聲が自分の身体のどこかでしているように思われることがある。虫の啼く声などもへんに部屋の中のように聞こえる。

「はあ、来るな」と思っているとえたいの知れない氣持が起こつて来る。——これはこの頃眠れない夜のお極きまりのコースであった。

変な氣持は、電燈を消し眼をつぶっている彼の眼の前へ、物が盛んに運動する氣配を感

じさせた。彫^{ぼうだい}大なものの氣配が見るうちに裏返つて微塵ほどになる。確かどこかで触つたことのあるような、口へ含んだことのあるような運動である。廻轉機のように絶えず廻つていくようで、寝ている自分の足の先あたりを想像すれば、途方もなく遠方にあるような氣持にすぐそれが捲き込まれてしまう。本などを読んでいると時とすると字が小さく見えて來ることがあるが、その時の氣持にすこし似ている。ひどくなると一種の恐怖さえ伴つて來て眼を閉いではいられなくなる。

彼はこの頃それが妖術が使えるようになる氣持だと思ふことがあつた。それはこんな妖術であつた。

子供の時、弟と一緒に寝たりなどすると、彼はよくうつつ伏せになつて両手で牆^{かき}を作りながら（それが牧場のつもりであつた）

「芳雄君。この中に牛が見えるぜ」と言いながら弟をだました。両手にかこまれて、顔で蓋^{ふた}をされた、敷布の上の暗黒のなかに、そう言えばたくさんの牛や馬の姿が想像されるのだつた。——彼は今そんなことはほんとうに可能だという氣がした。

田園、平野、市街、市場、劇場。船着場や海。そう言つた広大な、人や車馬や船や生物でちりばめられた光景が、どうかしてこの暗黒のなかへ現われてくれるといい。そしてそ

れが今にも見えて来そうだった。耳にもその騒音が伝わって来るように思えた。

葉書へいたずら書きをした彼の氣持も、その変てこなむず痒さ^{がゆ}から来ているのだった。

雨

八月も終わりになった。

信子は明日市の学校の寄宿舎へ帰るらしかった。指の傷が癒^{なほ}ったので、天理様へ御礼に行つて来いと母に言われ、近所の人に連れられて、そのお礼も済ませて来た。その人がこの近所では最も熱心な信者^{こうり}だった。

「荷札は？」信子の大きな行李^{こうり}を縛つてやつていた兄がそう言った。

「何を立つて見とるのや」兄が怒つたようにからかうと、信子は笑いながら捜しに行った。
「ないわ」信子がそんなに言つて歸つて来た。

「カフスの古いので作つたら……」と彼が言ふと、兄は

「いや、まだたくさんあつたはずや。あの抽出^{ひきだ}し見たか」信子は見たと言つた。

「勝子がまた蔵^{しま}い込んだるんやないかいな。いっぺん見てみ」兄がそんなに言つて笑つた。

勝子は自分の抽出しへごく下らないものまで拾つて来ては蔵い込んでいた。

「荷札ならここや」母がそう言つて、それ見たかというような軽い笑顔をしながら持つて来た。

「やつぱり年寄がおらんとあかんて」兄はそんな情愛の籠^{こも}つたことを言つた。

晩には母が豆を煎^いつていた。

「峻^{たかし}さん。あんたにこんなのはどうですな」そんなに言つて煎りあげたのを彼の方へ寄せた。

「信子が寄宿舎へ持つて帰るお土産^{みやげ}です。一升ほど持つて帰つても、じきにぺろつと失くなるのやそうで……」

峻が語を聴きながら豆を咬^かんでいると、裏口で音がして信子が歸つて来た。

「貸してくれはったか」

「はあ。裏へおいといた」

「雨が降るかもしれないで、ずっとなかへ引き込んでおいで」

「はあ。ひき込んである」

「吉峰さんのおばさんがあしたお帰りですかて……」信子は何かおかしそうに言葉を杜^と断^ぎ

らせた。

「あしたお帰りですか？」母が聞きかえした。

吉峰さんのおばさんに「いっとお帰ります。あしたお帰りますか」と訊かれて、信子が間違つて「ええ、あしたお帰ります」と言つたという話だった。母や彼が笑うと、信子は少し顔を赧くした。

借りて来たのは乳母車だった。

「明日一番で立つのを、行李乗せて停車場まで送つて行てやります」母がそんなに言つてわけを話した。

大変だな、と彼は思つていた。

「勝子も行くて？」信子が訊くと、

「行くのやと言うて、今夜は早うからおやすみや」と母が言つた。

彼は、朝も早いのに荷物を出すなんて面倒だから、今夜のうちに切符を買つて、先へ手荷物で送つてしまつたらいいと思つて、

「僕、今から持つて行つて来ましようか」と言つてみた。一つには、彼自身体裁屋なので、年頃の信子の氣持を先廻りしたつもりであつた。しかし母と信子があり「かまわない、

かまわない」と言うのであちらまかせにしてみました。

母と娘と姪^{めい}が、夏の朝の明け方を三人で、一人は乳母車をおし、一人はいでたちをした一人に手を曳^ひかれ、停車場へ向かつてゆく、その出発を彼は心に浮かべてみた。美しかった。

「お互いの心の中でそうした出発の楽しさをあてにしているのじやなろうか」そして彼は心が清く洗われるのを感じた。

夜はその夜も眠りにくかった。

十二時頃夕立がした。その続きを彼は心待ちに寝ていた。

しばらくするとそれが遠くからまた歩み寄せて来る音がした。

虫の声が雨の音に変わった。ひとしきりするとそれはまた町の方へ過ぎて行つた。

蚊帳をまくって起きて出、雨戸を一枚繰った。

城の本丸に電燈が輝いていた。雨に光沢を得た樹の葉がその灯の下で数知れない魚鱗^{ぎょりん}のような光を放っていた。

また夕立が来た。彼は闕^{しきい}の上へ腰をかけ、雨で足を冷やした。

眼の下の長屋の一軒の戸が開いて、ねまき姿の若い女が唧筒^{ポンプ}へ水を汲みに来た。雨の脚が強くなって、とゆがごくりごくり喉を鳴らし出した。

気がつくとき、白い猫が一匹、よその家の軒下をわたって行った。

信子の着物が物干竿にかかったまま雨の中にあつた。筒袖の、平常着ていたゆかたで彼の一番眼に慣れた着物だつた。その故か、見ていると不思議なくらい信子の身体つきが髭^{うぶ}とした。

夕立はまた町の方へ行ってしまった。遠くでその音がしている。

「チン、チン」

「チン、チン」

鳴きだしたこおろぎの声にまじって、質の緻密な玉を硬度の高い金属ではじくような虫も鳴き出した。

彼はまだ熱い額を感じながら、城を越えてもう一つ夕立が来るのを待っていた。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「青空」青空社

1925（大正14）年2月号

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utyama

校正：野口英司

1998年9月8日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

城のある町にて

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>